

パウロという人はとてもまじめで熱心なユダヤ教徒でした。生粋のユダヤ人。幼い時から聖書を学び、律法を学んできました。ユダヤ教徒にとって最も大事なことは律法という掟をまもり生きることでしたが、パウロは律法をまもることに関して最も厳格なファリサイ派の一員でした。律法をないがしろにするイエスなる人物を信じる群れを迫害していたのはほかならぬパウロ自身でした。そのパウロがイエス・キリストを信じる者となったのはどうしてだったのでしょうか。聖書を読むものなら、誰でも思う疑問です。彼はユダヤ教徒としての自分に行き詰っていてほかの教えを探していた、というわけではありませんでした。ファリサイ派の一員として、律法を厳守して生きる生き方に疑問を覚えていたとか、疲れていたとか、虚しさを感じていた、というわけではありませんでした。彼はどこまでも熱心なユダヤ教徒だったのです。そのパウロがキリスト教徒になったのは、ただ、イエス・キリストの声を聞いたからだ、と聖書は語っています。彼の体験に即していえば、イエス・キリストに出会ったからです。

パウロにとってキリストとの出会いは、自分はイエス・キリストのまことの中にすでに置かれているのだ、ということを知ることでした。自分がキリストをどうとらえるかではない。キリストの恵みの中に、信実の中に自分はすでに生かされているのだという発見でした。それはルカ福音書のあの放蕩息子のたとえの息子が自分の勝手に家を飛び出し、零落して帰ってきた。その自分のわがままを謝ろうと思っていたのに、父はその謝罪などとは無関係に彼を抱きしめた。彼を受け入れた。息子はその時、自分がどうであれ、このわたしは父の愛の中にいる、ということを知った、その知り方です。

律法を守ろうが守るまいが、そんなことには全く関係なく、イエス・キリストの恵みの中にわたしはある、ということに気づく。自分の存在がどこにあるのか、それがパウロのキリストとの出会いでした。だからパウロの歩みはそこを基点として全く質の違うものに変えられるのです。生きることのスタンスが変えられたのです。それをパウロはガラテヤの信徒への手紙の中でこう記しています。「わたしは神にたいして生きるために、律法に対しては律法によって死んだのです。わたしはキリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしのうちに生きておられ

るのです。わたしが今肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身をささげられた神の子のピステイス・まことによるのです。」わたしはかつて「自分から」生きていた。自分から律法を守って生きてきた。だが、キリストに出会って、ただキリストのまことの中にいるわたしを知り、このまことから生きることを知った。自分から生きるのではなく、キリストの中にあるものとして生きる。パウロはもちろんキリストに出会う前、神を信じていました。しかしそれは自分の頭で捉えた神であり、自分から見ている神でした。キリストに出会って、そういうふうに自分が神をどう理解するか、捉えるか、ということでは全くなく、キリストのまことの中にある自分を知るのです。しかも自分はそのキリストのまこと、十字架と復活によって生かされている、それによって生きる自分を知るのです。だからパウロはキリストに出会って、自分も十字架つけられた、というのです。十字架につけられて、これまでの自分の信じていた信仰生き方は死んだ。今わたしが生きているのは、キリストのまことの中に生かされている自分。キリストによる自分だ、というのです。ローマの信徒への手紙の中では彼は自分はキリストの体の中にある、という独特の表現を書き記しています。自分は今キリストの体の中で生きるものとされている、という転換が書かれています。それが彼のキリスト者としての出発です。

今朝朗読された使徒言行録15章はエルサレムで行われた教会会議のことが書かれています。どうしてこうした会議が開かれたか、というと、パウロのいるアンティオキア教会にユダヤから来た人々が、キリスト者であっても、律法の定める割礼を受けなければ救われない、とって教会の中で論争が起こったからです。割礼を受けなければだめだ、というのはもう少し踏み込んで言うと、キリスト者もユダヤの律法は守らなければ救われない、といったということです。エルサレム教会とは違い、ここアンティオキア教会はユダヤ人以外のキリスト者もすでにたくさんいました。当然、割礼を受けていない人はたくさんいました。

救われるためにはキリストの恵みだけでなく、律法を守ることが必要なのか、教会の中の論争が激しかったのでしょうか、パウロとバルナバの他数名のものがエルサレム教会に行き、そこで協議をすることになったのです。ユダヤ教徒にとって、律法を守って生きることは理屈ではない。生活です。生まれたときから、律法の中で生活している彼ら彼女たちにとって、これなくしてどうして信仰生活などあろうか、というものなのです。だから、協議といっても相当の困難が予想される協議でした。どちらの立場が正しいのか、ということ

を多数決で決めるというような話ではないからです。根本には、キリストの福音とは何か、ということが横たわっている。だとすれば会議に集められたものが、協議の中で、神のみ旨はどこにあるか、何が神のみ心なのか、聞き続ける勇気がなければ、教会の会議と言えども、たんに人間の知恵か、政治的な力学に終始してしまう。

4節を見ると、パウロたちはエルサレム教会に着くと神が自分たちと共にいて、行われたことを、ことごとく報告した、とあるのです。パウロたちはここで、神学的な議論をしようとか、理屈を並べようとしているのではないことがよくわかるのです。パウロには、そうすることもできたでしょうが、彼はそうした智慧ではなく、神が共にいてわれわれの間で行われた事実を報告しているのです。

さてエルサレム教会の中のファリサイ派から信者になった人たちが発言を始めました。彼らはユダヤ人以外の外国人信者にも割礼を受けさせよ、と迫るのです。神の民なら、神の掟を守るのは当然だ、と発言しているのです。

パウロがこの発言をどんな思いで聞いていたか、想像することはとても大事なことです。そもそもパウロはこの発言者と同じ、ファリサイ派の出身であり、律法遵守にかけてはどんな人にも引けを取らない人だった。だからこの発言の出所はよくわかる。気持ちもよくわかる。

だが、パウロはキリストに出会って根本的な転換を経験したのです。それは自分がどういう人間かということや、自分が神にたいして何をしているか、ということは神の救いを受けるにあたっては何の関係もない。関係ないどころか、それを振り回すことは、救いを受けるにあたって邪魔ですらある、ということを知ったのです。そもそも、神の救いを受け取るという意識に先行して神はもうすでにわたしたちをキリストのまことの中においてくださっている。生まれたばかりの人間のいのちが本人のどんな思いよりも先に母の胎の中にあるように、キリストの体の中にある自分を知る、それは、ただ、無条件、無償、何も問わない、ということです。自分がどんな罪人であろうが、情けない人間であろうが、そこから生きるのです。生きれる。そのゼロポイントから始める生き方こそ、キリストの福音なのです。だから割礼を受けるとか、律法を守る、というようなことは生き方の中の選択肢の一つではあっても、福音から生きる、というところでは全く関係ないのです。パウロはここで割礼を受けろ、という人たちとガチンコでぶつかるほかなかった。

さて協議は議論を重ねた後にペトロが立ち上がり、発言します。

ペトロは、わたしが選ばれたのは、異邦人がわたしの口から福音を聞いて信

じるようになるためだ、と語り、異邦人にわたしたちも負いきれなかつくびきを懸けるべきではない、と言います。そして、最後に「わたしたちは、主イエスの恵みによって救われると信じているのですが、これは、彼ら異邦人も同じことです。」と語るのです。少なくともここでペトロは律法というくびきは必要ない、と言っているのです。議論を重ねていた人々はペトロの発言に聞き入り、静かになった。バルナバとパウロは、自分たちを通して神が異邦人の間でどう働いてくださったかを語り、キリストの福音のみが語られることで、人々が救いへと招かれていったことを語ったのです。最後に主イエスの弟ヤコブが立ち、語った。彼は割礼のことで異邦人を悩ませてはならない、と言い、それに付け加えて、いくつかの規程を持ち出し、これは守ってほしい、と言ったのです。

ヤコブの発言はとても微妙な発言です。一方ではパウロの言うことを同意していることを表明している。だが、割礼などどうでもいいとは言わない。むしろ異邦人を悩ませてはならない、というのは、ユダヤ人側に立っての上から目線です。しかも最後には最低限の掟を持ち出してきた。つまり割礼を求めるユダヤ人たちとパウロたちの間に立った発言です。調停的な発言です。これは、結局のところ人間的な知恵なのではないか。そして事実会議としては、この発言を受けて協議を閉じるのです。だが、ヤコブは福音を聞いて信じていたのか。キリストのまことの中にいる自分に出会っていたのか。このとき、エルサレム教会の実権はヤコブに移っていて、ペトロではなくヤコブが実質的な指導者だったと考えられます。しかしそうであれば、ヤコブはどこに立っているのか、問われます。福音に聞いて、キリストと出会い、キリストのまことの中にすでに生かされている自分に、今日また新たに出会って、そこから歩いていきましょう。